

自然遊学館 だより

2004 WINTER (No.30)

2004.1.12

鳴く虫の声を聞く会

日時：2003年10月11日(土) 19:00～21:00

場所：自然遊学館、市民の森

講師に日本直翅類学会の河合正人さんを迎えて、「市民の森の鳴く虫の声を聞く会」を行いました。参加者はスタッフを含めて18名でした。この行事は今年で3回目になります。自然遊学館多目的室で、コオロギやキリギリスの仲間の発音のしくみや耳の位置、それぞれの種の生息場所などについて解説を受けたあと、市民の森に出て、実際に鳴く虫の声を聞き、採集も行いました。



採集した鳴く虫の説明(右が河合先生)

鳴き声が聞かれた種(10種)

バッタ目

コオロギ科：ツツレサセコオロギ、ハラオカメコオロギ、ミツカドコオロギ、エンマコオロギ、アオマツムシ、ヒロバネカンタン、マダラスズ、シバズズ

カネタタキ科：カネタタキ

キリギリス科：ホシササキリ



アオマツムシ成虫

(樹上生活する種、ふ節にある吸盤と棘によって、葉にしっかりと張り付いているので、意外に採集しにくいという解説を受けました)

その他の採集された種

バッタ目

キリギリス科：クビキリギス

バッタ科：トノサマバッタ、マダラバッタ

オンブバッタ科：オンブバッタ

カマキリ目

カマキリ科：チョウセンカマキリ、コカマキリ

ゴキブリ目

ゴキブリ科：クロゴキブリ

チャバネゴキブリ科：モリチャバネゴキブリ

河合先生には、採集されたそれぞれの種の鳴くしくみや生態について、詳しく解説していただきました。エンマコオロギを採集した時には、左右の翅を手でこすり合わせて、「無

理矢理」鳴かせたり、トノサマバッタでは(鳴き声が聞かれた種に含めませんでした)、後脚と翅をこすり合わせて、コオロギ類やキリギリス類とは異なった方法で鳴くことを「実演」してもらいました。

一昨年に鳴き声が確認されたキンヒバリと昨年に採集されたウスグモスズは、今回は残念ながら確認されませんでした。市民の森は埋立地に造成されたもので、「これだけの面積でこの種数は少ないですが、今後、ほかの種が侵入してくる可能性があります」という話でした。

(岩崎 拓)

十周年記念フォーラム

「たのしい自然の総合的学習」

日時：2003年10月11日(土) 19:00～21:00

場所：関空交流館

関空交流館を会場に、「たのしい自然の総合的学習」と題して、記念フォーラムを行いました。これは子どもたちへの環境学習、総合的学習に携わる方々にひろく呼びかけ、自然遊学館のさまざまな行事と、そこで見られた動植物の解説をとおして、身近な自然を楽しみながら学ぶ方法を紹介する企画です。

スタッフ全員の紹介と、行事の紹介をかねた貝塚の動植物の解説に加え、遊学館を支えるボランティア活動の紹介がありました。貝塚の生物相だけでなく、遊学館が市民の方々の熱意と協力・子どもたちの参加・スタッフの調査研究によってできている館であることもお伝えできたと思います。また、会場に設けた「カニ釣り」の体験コーナーはたいへん人気がありました。

当日は、阪南地域の小中高等学校の教職員を中心に、平日の午後という条件にもかかわらず約40名の方の参加がありました。

会場からは「夏休み明け学校のプールにたくさんのヤゴがいたが、今年産まれたものなのか」「プールにいるミジンコはどうやって来たのか」などの質問がありました。答えを知りたい人は、遊学館で聞いてみてください。

(西澤 真樹子)

河口のヨシ原で遊ぼう

日時：2003年11月8日(土) 10:00～12:00

場所：近木川 永久橋

ヨシ笛やよしずを作って遊ぶ行事で、今年は24名が参加しました。去年に比べてヨシが減ったため、ヨシ笛づくりとクズのツルを使ったかご作りなどを楽しみました。

永久橋の下の河原は土が堆積し、荒れ地の植物が多くなっています。オオオナモミ、セイタカアワダチソウ、カナムグラ、アレチウリ、クズなどが目立ちました。ヨシ原はすこし下流に繁茂していました。



この日、「クズの根っこを掘りあてれば葛粉がとれる!」と意気込んで、10m以上もやぶをかきわけつつくずの根を掘りましたが、最

後に取り出したのは…手のひらサイズの根っこでした。

確認された植物：ホシアサガオ・ケイヌビエ・アキノノゲシ・ヌカキビ・オオクサキビ・アレチハナガサ・ハッカ・カナムグラ・ヤエムグラ・オギ・ヨシ・アレチウリ・セイタカアワダチソウ・イヌムギ・オオオナモミ・イヌホウズキ・オシロイバナ・アキノエノコログサ・ジュズダマ・セリ・アキメヒシバ・ヨモギ・ナンバンカラムシ・メリケンガヤツリ・ホソアオゲイトウ・クレソン・シロザ・セリ・ノハカタカラクサ・ハコベ・エゾノギシギシ・アシボソ・ホナガイヌビユ・メヒシバ・イシミカワ・ガマ

確認された昆虫：ツマグロヒョウモン、クビキリギス、コカマキリ、ミイデラゴミムシ、サナエトンボの脱皮殻、ミズムシ

確認されたカニなど：アカテガニ、モクズガニ、クロベンケイ、アメリカザリガニ

確認された魚：トウヨシノボリ、メダカ

その他：サカマキガイ、カナヘビ、イタチとタヌキの足跡



(湯浅 幸子・西澤 真樹子)

なんでもやってみ隊定例会

日時：2003年11月22日(土) 9:30~12:00

場所：近木川 永久橋

西小学校の「なんでもやってみ隊・近木川の生きもの調べ班」の第3回例会が永久橋下のヨシ原で行われ、遊学館からもスタッフが参加しました。11月8日の行事と同じように、みなさんはクズの根掘りに挑戦。クロベンケイガニやムカデ、ゴミムシのなかまなど、土の中から次々に現れる生きものに歓声を上げていました。また、この日には橋げたに作られたコシアカツバメの古巣も見つかりました。翌春の観察が楽しみです。イタチやタヌキと思われる足跡も多数確認されました。

確認した植物(前回の記録に追加)：ボタンヅル・ヒガンバナ・カミガヤツリ・

確認された昆虫：アオゴミムシ・オオナガゴミムシ・マルカメムシ・ツチカメムシ・アカシマサシガメ・ホシハラビロヘリカメムシ・フクラスズメの幼虫

確認された鳥：コガモ、カルガモ、アオサギ、コサギ、アカハラ

その他：クロベンケイガニ、ハエトリグモの仲間

(西澤 真樹子)

トンボの池干し

日時：2003年12月13日(土) 10:00~15:00

場所：自然生態園 トンボの池

自然生態園のトンボ池の底に溜まったごみや植物の掃除と、池の中にいる生き物の種類や個体数を調べるために、トンボ池の水抜

死体拾得 2 例

き作業を行いました。作業開始直前に雨が降り出しましたが、調査が始まってしばらくすると雨も上がって暖かくなり、まさに作業日和でした。池の中にはアオミドロが繁茂しており、池にいる生き物を探すのはなかなか大変でした。

池の中にいた生き物たち

アオモンイトトンボ属 (55) クロスジギンヤンマ (44)、ギンヤンマ (28)、マルタンヤンマ (17)、シオカラトンボ属 (71)、ショウジョウトンボ (64)、アメリカザリガニ (295)、コマツモムシ、ユスリカ科幼虫、ヒメガムシ成虫、ムネカクトビケラ属の 1 種、ヒメタニシやサカマキガイ、ヒメモノアラガイ、カワバタモロコ、トウヨシノボリ、スジエビ、帰化生物のハブタエモノアラガイなどが確認されました。

捕まえた生き物の数の上位 3 人は岡田真



太郎君、高野晴一郎君、岸野浩己君でした。

捕まえたアメリカザリガニの一部は参加者の方が持ち帰り、残りは遊学館で飼育しています。また、ヤゴは全てシェルシアター内に設置した 2 つの野外水槽 (?) で、ギンヤンマ・クロスジギンヤンマ・マルタンヤンマとそれら以外のヤゴに分けて飼育しています。1 月中旬頃トンボ池に戻す予定です。

11 月 7 日午前 9 時、秋武仁志さん(貝塚市窪田)より電話、二色北町の路上にフクロウのような鳥の死体を見つけたとのこと、ご家族の明夫さん、斉子さん、水月さんが車で現場へ案内して下さった。仁志さんからの第 1 報を受けて、斉子さんがすでに道路脇に避けて下さっていたので、口から血を出してはいるものの、無傷のコミミズクが横たわっていた。そう、やはりコミミズクだった。

電話をいただいたときからコミミズクでなければいいが、と念じていた。というのも、2002 年 4 月 7 日、綿石慶太さんが、同じ二色北町海沿いフェンスにとまり、余り人間を恐れないコミミズクを撮影し、自然遊学館だより No.24 に、「貝塚人工埋立地でコミミズクを確認」という記事を書いておられたからだ。無念だった。やりきれなかった。埋立地に住みつく希望の猛禽類だったのに。

体長 37cm、重さ 281g、ハジラミ多数、ダニ 1 を採集した。死因は分からない。



大阪市立自然史博物館の和田岳学芸員から、コミミズクの顔つきは 1 羽ずつ違うと聞いているので、剥製ができあがってきたとき、もう一度辛い確認をすることになるだろう。

12月7日午前10時過ぎ、自然遊学館へ出勤途上の岩崎拓が、二色3丁目第5プール付近の西行路上で、まだ温もりのある状態のタヌキの死体を拾得。9時前に同じ場所を通過した他の職員2名は目撃していないので、9時から10時の間に交通事故にあったのかもしれない。自然遊学館に持ち帰って冷蔵保存し、翌12月8日、西澤真樹子が解剖した。



タヌキ死体発見の報は、12月7日午後、阪奈道路走行中に携帯電話で聞いた。その日朝、岸和田市水道みちで1頭、奈良県室生寺近くで1頭、いずれも交通事故死のタヌキに出会い、3頭目の報だった。わざわざ携帯電話で知らせてくれたのは、このタヌキが、過日、都市公園「市民の森」の海辺、雨水柵の中から人間を見上げていたタヌキではないかと思われたからである。

11月1日、吉田福美さん（二色4丁目）が、市民の森にタヌキがいると通報、翌11月2日、現場に案内してもらい柵の中を覗き込むと、下から見上げていた。お菓子を投げ入れると啜って方向転換し、柵に続く管の中に消えた。もう一つ投げ入れるとまた現れ、カメラを取りに館へ戻って引き返しても、好奇心いっぱい目で見上げていた。「市民の森は、タヌキがいっぱいいる森になるかもし

れない」。1匹見ただけで、そう連想するのが筆者の特長、数日間タヌキとの逢瀬を楽しんだ。11月3日は雨がかなり降り、4、5、6日と降ったりやんだり、雨水柵には水が溜まってタヌキは見えず、それっきりお目にかかれなくなった。

そして12月7日、40m離れた地点でのタヌキの死体である。柵の中から見上げていたタヌキの写真を、死体のタヌキと比べてみると、顔周辺の模様がよく似ていて、同一個体の可能性が高い。

かくして「タヌキのいっぱいいる市民の森公園」は、はや夢と消えた。

（白木 江都子）

ブチサンショウウオを見つけて

12月3日（水）、近木川の源流探検の下見で、ブチサンショウウオ（1匹）を発見しました！！その日、私は風邪気味だったので、体を動かせば治ると勝手に思い込み、少し無理して山に登りました。ところがその山道（けもの道？）の険しいこと！かなり神経を使うわ、ヤブタバコが足にくっつくわ、散々でした。そんなこんなで、無事に任務を果たし山を下りました。山を下りる途中で、以前にブチサンショウウオを採集したという場所を通ったので、もしかしたら採集できるかもしれないと思い探しました。手でどけることができるくらいの石を、一つ一つ丁寧にどけていき、およそ30個目（ほんまか？）の石をどけた時、何かうねうねと動く物体を発見しました。そうです、ブチサンショウウオです。「うおっ！！」と、叫んだかどうか

は定かではありませんが、驚いたのは確かです。ついに、あの長年夢に見てきたサンショウウオを GET したのです。その時の私の喜びようといったら、筆舌に尽くしがたいものがありました。もともと、サンショウウオの類（「たぐい」と読みます）は夜行性で、鳴くこともないので滅多に見つけることができない両生類です。私自身、サンショウウオを発見し、この手でじかに触ったのは初めてでした。

話はそれますが、「サンショウウオ」とは、カエルなどと同じで両生類にあたります。カエルは成長すると尾が無くなりますが、サンショウウオは成長しても尾が無くなりません。まあ、見た目はイモリみたいなものです。主に河川の源流域、魚も生息しない所にいます。日本の小型サンショウウオは約 18 種います。サンショウウオと言えば、オオサンショウウオを思い浮かべるかもしれませんが、実はブチサンショウウオのような小型のサンショウウオの方が種数が多いのです。大阪近郊で見られるのは、他にカスミサンショウウオとヒダサンショウウオがいます。カスミサンショウウオはブチサンショウウオと異なり、低地の止水域に生息しています。サンショウウオは色彩の変異が激しく、同種でも地域によって色彩が異なり見分けのつきにくい生き物です。また、生態が詳しく分かっていない生き物でもあります。興味のある方は調べてみてはどうでしょうか。

話は戻りますが、このブチサンショウウオは現在、岸和田市の自然資料館で飼われていることをご了承下さい。というのも、私は岸和田自然資料館でもアルバイトをしていて、そこの方が世話をできる時間が多いか

らです（自然遊学館でのバイトは週 1 日だが、資料館でのバイトは週 2 日だからね）。一般的に、展示するための生き物を飼うのは難しいことでして、お客様に観察していただくためには、ぱっと見てすぐそれと分かるようにしなければならないのですが、そのようにすると実は、生き物によっては悪影響を与える場合があるのです。このブチサンショウウオなどは良い例で、自然界では先程申した通り夜行性で、昼間は石の下などに隠れています。ですから、それをお客様に見せるためには、無理矢理、昼間の光にさらすことになります。そうすることが、ブチサンショウウオにとって良いはずがありません。つまり、生き物を大切にすることと、展示して見やすいようにすることは矛盾することがあるのです。現在、展示している水槽は小さいですが、底面フィルターでろ過していて、中にはコケも入っているのも非常に自然生息環境に似た空間で飼育しています。そうすることにより、ブチサンショウウオも落ち着いて、エサをバクバク食べています。その食べっぷりたるや、イモリの比ではありません（意外とゴーカイでびっくり!!）。しかし、その分、見にくくなっていますので、よく探してみてください。おそらくコケの下にいます。ご覧になりたい方はきしわだ自然資料館までいらしてください。

今回、採集したのは 1 匹だけですが、おそらく本格的に探せば、まだまだ生息していると思われます。しかし、サンショウウオは、水のきれいな所にしか生息しない生き物です。そのような河川は現在、数えるほどしかないと思われます。もし、サンショウウオの生息する近木川が、今以上に汚れてしまった

ら、おそらくサンショウウオも生息しなくなるかもしれません。逆に今以上にきれいになれば、サンショウウオがもっと増え、もっと間近にみるができるかもしれません。我々貝塚市民は、近木川をきれいにするために、より一層の努力が必要ではないでしょうか。

(皿池 伸夫)

西村恒一氏寄贈のナガサキアゲハ標本

昨年の12月に貝塚市地蔵堂在住の西村恒一氏から、ナガサキアゲハ *Papilio memnon* の♂1個体の標本を当館へ寄贈いただきました(図1)。この標本のデータは「1994年5月7日(11:00頃)、水間公園、モチツツジに訪花」です。当館にはこれまで、本種の貝塚産標本は所蔵されていませんでした。皆さんがふだん目にする機会が多いクロアゲハ、モンキアゲハ、オナガアゲハ、あるいはカラスアゲハといった *Papilio* 属の黒っぽい色をしたアゲハチョウには、後翅に尾のような突起があるのに対して、ナガサキアゲハには写真のように尾はありません。

近年、国内において分布を北方へ広げているチョウ類は多く知られていますが、その代表とも言えるのが、このナガサキアゲハです。本種の分布拡大を研究している大阪府立大学の吉尾政信氏の論文(「昆虫と自然」第37号:2002年)から引用すると、「本種は1940年代には山口県が分布北限であったが、その後分布を拡大し、1990年代には近畿地方のほぼ全域に、そして現在では東海・関東地方にまで分布している」ということです。また、

吉尾氏が文献調査でまとめた近畿地方での採集リスト(1974年が最初で1993年まで:「昆虫と自然」第29巻:1994年)によれば、貝塚市に関しては、1986年8月の海塚での記録が1例掲載されています。



図1. ナガサキアゲハの成虫
1994年5月7日水間公園
採集者:西村恒一

皆さんはなぜ多くのチョウ類が分布を北方に拡大しているか考えたことがありますか。吉尾氏のナガサキアゲハに関する研究は「気候が温暖化して北方でも生息できるようになった」か、あるいは「本種の一部の個体が北方でも生息できるように性質を変えた」のかどちらが正しいのかを実験的に明らかにしようとしたものです。その他に、農作物や園芸植物の栽培地の拡大によってそれを餌とする昆虫が分布を広げることもあるそうですが、ナガサキアゲハの幼虫の餌はほとんど全国で栽培されているミカン科なので、そういう原因は本種には当てはまらなると考えられます。吉尾氏は国内のいろいろな場所から採集した個体を用いて休眠性を調べた結果、「少なくとも鹿児島県から近畿地方に分布する本種の休眠性には違いが認められなかったので、その分布拡大は気候の温暖化が原因である可能性が高い」という結論を得ました(日本語としてのまとめは、「南

大阪の昆虫」第4巻：2002年）。

気候の温暖化によって、これからも南方に生息している他の昆虫たちも貝塚市に分布を広げてくる可能性があります。貝塚の昆虫が増えてうれしいという方がいるかもしれませんが、南方に生息する有害な昆虫も侵入してくるかもしれません。反対に、和泉葛城山の山頂付近に生息する昆虫は、ブナとともに冷涼な気候に適応したものもあり、それらの昆虫は生息できなくなる可能性があります。生息できなくなる原因には、昆虫自身が気温の上昇に対応できない場合と、餌として利用している植物が気温の上昇に対応できない場合が考えられます。異様に暖かい今年の冬ですが、和泉葛城山の昆虫たちの中には、暑い暑いとうなされているものもいるかもしれません。

ナガサキアゲハの標本を寄贈していただいた西村恒一氏、および原稿をチェックしていただいた吉尾政信氏に謝意を表します。

(岩崎 拓)

府立貝塚南高校生物科からの標本寄贈

大阪府立貝塚南高校より生物科教室の標本棚に長年、保管されていた標本の一部の寄贈を受けました（9月3日付）。これは生物部員の方たちによって、1970年代後半に貝塚市内各地で採集された植物の標本を中心とした標本群です。

貝塚南高校周辺から千石荘、和泉葛城山などで採集した150点程の植物標本は、当時の植生を知る上で貴重な資料といえます。

また他に、近木川上流で採集した水生昆虫

をアクリル樹脂に封入した標本や、生物部員が毎年夏に合宿を行っていた和歌山県南部町千里海岸で採集した魚類や海岸動物の液浸標本30点程があります。

今回の標本寄贈に際して、橋渡しをしていただいた元生物部顧問の河添純子教諭はじめ、生物科教員の方々に謝意を表します。

(山田 浩二)

★自然遊学館スタッフの日誌より★

自然遊学館で起きたいろいろな出来事を
トピックスでお伝えします。

11月8日（土）永久橋でアカハラの交通事故死体を拾いました。とてもきれいです。宮本久美子の話では、幼鳥とのこと。



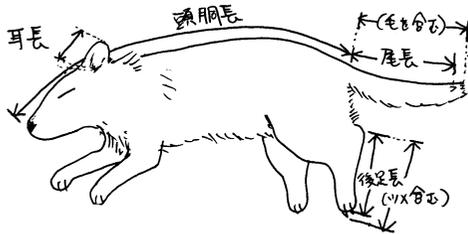
死んでいたアカハラ

同日、河原で捕まえたカナヘビのまぶたにアレチウリのトゲが刺さっていました…見るからに痛そうです。こんな生き物にもトゲが刺さることがあるのか、と思いつつピンセットで抜きました。（西澤）

11月14日（金）姫路工業大学新穂ゼミ4

回生の井上健一さんが前年に続いて、市民の森のセアカゴケグモ調査に来られました。遊学館の周囲の溝で「簡単に」多数のみ、♀、卵嚢を発見。完全に定着していますので、ご注意ください。(岩崎)

12月8日(月)東京の実家に帰省していた私に、遊学館から「タヌキ拾った!」と電話が入りました。とにかく死体が痛まないように処置をお願いしてから、翌日8日遊学館で解剖を行いました。



哺乳類の計測には頭胴長、尾長、後足長、耳長、そして体重を計ることになっています。このタヌキは♀の成獣で体重約3.8kg、頭胴長640mm、尾長176mm(毛まで含めると236mm)、後足長108mm(ツメを含めると114mm)、耳長49mmでした。哺乳類は骨をみると大まかな年齢がわかるのですが、骨格標本ができあがっていないので今はまだ不明です。骨格が完成したら、あらためて報告します。



右の脇腹からは出血が見られ、肋骨と頭骨が折れていました。道を渡ろうとして車にはねられ、即死したのでしょうか。

体は温かそうな冬毛でおおわれ、皮膚の下には驚くほどに厚い脂肪の層がありました(私がいままで解剖したタヌキの中でもかなりの“おでぶちゃん”です)。これは、冬のせいなのか、餌付けや残飯をあさったりしたことで太ったからなのか、原因はわかりません。

実は自然遊学館周辺でタヌキが確認されたのは、今回がはじめてではありません。1997年6月24日の夜、脇浜交差点の前の道路を渡っていたところを、当時のアルバイトだった渡部哲也さんが目撃しています。このことから、タヌキは人家の近くに現れており、4ページで白木さんも書いているような「タヌキの集まる市民の森公園」の夢は意外に早くかなうかもしれません。ですが、それは市民の森公園が大きく育って、餌付けに頼らずタヌキが自力で生活できるような環境が整ってからもいいのではないかと思うのです。例えば自然生態園の「ドングリの森」にドングリがわさわさ実ってネズミ類が増え、落ち葉がミミズや土壌生物を育てるようになってから…。

今は、パイオニアになったタヌキたちが適当に人間を恐れつつ、付かず離れずの暮らしをしながらその時を待ってくれないかな、と考えています。(西澤)

12月24日(水)当館の所蔵標本を中心に、貝塚の動植物を紹介する冊子「貝塚の自然—創館10周年記念号」の編集を終え、ようやく印刷に出すことが出来ました。予定より約3ヶ月も遅れてしまい、予定通りに寄稿して

いただいた方々にはご迷惑をお掛けしました。(岩崎・山田)

「二色浜の海藻」が展示されました!!

二色浜の海辺では季節に応じて、様々な海藻が石積み護岸に着生していたり、砂浜に打ち上げられたりしています。今回新たな常設展示として、海藻展示コーナーを設けました。二色海岸における1998年からの採集で、30種余りの海藻が確認された中から、13種(アナアオサ、ウスバアオノリ、オキツノリ、オオバツノマタ、オバクサ、フダラク、マクサ、フシツナギ、カバノリ、オゴノリ、タマハハキモク、シダモク、フクロノリ)を展示しています。展示物は「海藻おしば協会」の河原美也子さん(阪南市)の手によって、きれいな海藻おしば標本にして頂いたものです。また、自然遊学館設立10周年を記念して、館をイメージした海藻おしば作品「～海の森から夢をのせて～」も作って下さいました。



～海の森から夢をのせて～

『自然遊学館の建物のデザインでもあるアンモナイト、そして自然を愛する人達が生まれるイメージを海藻おしばで表しました』河原美也子

(山田 浩二)

「昆虫の食性展」のご案内

日時：2004年1月17日～2月22日

場所：自然遊学館多目的室

昆虫には、捕食者、植食者、菌食者、捕食寄生者、寄生者、腐食者、雑食者などさまざまな食性を持つものが含まれます。それぞれの昆虫が「いつ」「何を」「どのような方法」で食べているのかを、生態写真、標本、図表を用いて紹介します。その他の解説事項は、昆虫の口器の形態、物質とエネルギーの循環、昆虫の繁栄と食性の関係などです。生態写真は、五藤武史氏、昆虫写真家のがたろ氏、および橿原市昆虫館に提供していただきました。また、平田慎一郎氏にはカマキリモドキの生活史に関するパネルを作成していただきました。なお、この特別展の期間中は、図書コーナーの一部が利用できなくなりますので、ご了承ください。

(岩崎 拓)

自然遊学館だより 2004 冬号 (No.30)

発行日 2004.1.12

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 0724 (31) 8457

Fax. 0724 (31) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.osaka.jp

<http://www.city.kaizuka.osaka.jp/shizen/index.htm>